

京鹿子

令和元年十月一日発行
通巻一四二号(毎月一日発行)



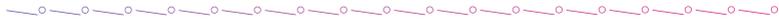
10月号

鈴 鹿 呂 仁

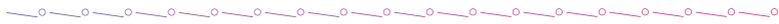
拾掬集 その四十九



閑 伽 桶 の 水 の 容 に 処 暑 の 風
初 瀬 よ り 処 暑 の 峠 へ 廻 り 道
赤 と ん ぼ 素 知 ら ぬ 貌 の 駅 ホ ー ム
赤 と ん ぼ 穂 波 の 空 も 青 々 と
星 飛 ん で 棚 田 千 枚 揺 る ぎ な し
底 紅 の 空 を 翳 ら す 女 人 堂



追伸の「秋」の一文字窓素秋
手さぐりの米櫃の底稲びかり
野分立つ亜細亜三国ひと睨み
竹林の風の結び目秋初め
安^{あん}心^{しん}を二尊の手より涼新た
祇王寺の空蟬ひとつ悲話を抱く
あだし野の風は骸に螻蛄鳴けり
首塚の秋蝶二頭陽をこぼす



— 近
詠 —

秋の声

鈴鹿 仁



竹林の風の持て成し嵯峨素秋

名の流る名古屋の滝や秋の蟬

嵯峨径のしるべ古りしや稻の花

銚杉の山の魂呼ぶ秋の声

一滴の秋水のこゑ硯石

近詠

和田 照海

真桑瓜

梅花藻の花暮れ残る忍野村

来し方に付箋はひとつ水中花

潮の目に二兎追ひ漁やながし南風

飛魚とんで遠流の島をはるかにす

真桑瓜冷やされてゐる祖谷挽歌



松本 鷹根



晩 夏

花の名は巨椋瑞光蓮の鉢

番傘に昭和の匂ひ夕立晴

下駄の音の火影纏ひに星祭る

晩夏光木の灯台に添うて立つ

軒深く晩夏愛しむ浮御堂

近 詠

塩貝 朱千

巫 女 の 鈴

拝殿を越ゆる七夕願ひ笹

夏祓男ひとりに巫女の鈴

白雲の七重睡蓮ねむきころ

青き実をくはへ結界より鴉

夕風をまとひ小揺らぐ浜おもと

英華採集

火の糸をあえかに梳けり蛍川

福 山 高堀 洋子

蛍は、約十日の命をこの世に授かる運命さだめを持ちながら生まれる。この運命を知っているかのように火を炎やしている。その姿は、人の目には幽玄かつ甘美な世界に映り楽しませてくれる。掲句は、無数の蛍が川の上を乱舞している様を詠んでいるが、蛍火の描く残像を火の糸と捉え、女性が髪の毛のある時は直線的に、ある時は曲線的に梳いている様と重ね合わせる。それは、蛍川を眺める作者の心象の奥深いところにあるあえかな炎へとつながる。

明易し噛みそこねたるホツチキス

北桑田 小島須磨子

何枚かの資料を束ねる時には、ホツチキスは便利であるが故によく重宝されている。しかし、資料の束が分厚くし過ぎるとホツチキスが効かなくなることがある。掲句のように「噛みそこねたる」状態を生むのである。そうすると、色々と手間が掛かり時間も過ぎて行きイライラとストレスを感じるようになる。「明易し」の季語の設定は、至極当然のように配されたものとなっている。

梅雨空や動きの鈍い薬指

京 都 矢野 早苗

薬指は、別名「紅差し指」と呼ばれる。作者が女性となれば当然この紅差し指となるであろう。鬱陶しい空を眺めていれば、折角のお出掛け気分も凋んでくることになる。約束であるから鏡に向かつてはみたものの一向に気乗りがしない。紅差し指の動きが鈍いのである。梅雨空と薬指の設定で、女性の心の機微がよく描かれている。

神麓集

みちおしへ

藤岡紫水

古日記戦さのあたり紙魚走る
うから寄り一盞の贅鱧づくし
逢ふてまた別れる道やみちをしへ
待つことの孤独に馴れし蟻地獄
推古より瑠璃の輝やき玉虫に

すがれ虫

沼田巴字

粧へる山参道を長く持つ
老い一人暮らす世の中猫じやらし
夕映えをひとり占めせり秋の雲
やはらかき草の根ぬらす秋の雨
ふり捨てる哀しみ幾つすがれ虫

螢火

丸井巴水

花火爆ぜげんこつ飴を片頬へ
螢火の点滅抜けて通ひ窓
軽すぎる日傘傾げて待てば来る
梅雨雲を抜け山巔の小屋筵
双蝶の戯れ美女が振り向けり

苔の花

植村蘇星

縁とはひよんなる出合ひ苔の花
遠雷や一雨欲しき天見つむ
何時の世も今を吉とし今朝の秋
虫の音に誘はれ路を迷ひたり
前略に追伸長なが秋暑し

神麓集

赤とんぼ 北川孝子

処暑の寺会ふ人ごとに会釈して
放心か無心か見送る赤とんぼ
三杯酢欲しき処暑の小昼かな
齒磨きはペパーミントや処暑あした
赤とんぼ過ぎし日のみな透きとほり

ががんぼ 直江裕子

葦の青終の高さに人寄せず
紫陽花の五番目のいろ局部麻酔
光秀がきつと愛した花あせび
声にならない呻き地を這ふ牛蛙
ががんぼの翅かも知れぬ絶版本

万華鏡 高木晶子

祇園会の屏風いきいき万華鏡
悼む日の金魚灯籠廻りづめ
もう逢へぬ地に下り立てば草いきれ
傷あらば乗れさうもなき雲の峰
玉蜀黍のひげを集めて尉と姥

ひぐらし 伊藤希眸

朱を抱へ十若くなる盃蘭盆会
蚊帳吊草親子三代凭れにけり
浴衣婦人の絵に夕暮れの押し迫る
秋明菊俗人凜と背を伸ばす
石斧を掘りあてし頃ひぐらし鳴く

神麓集

紙魚 奥田筆子

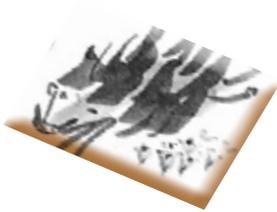
まだ起きて紙魚に仲間と慕はれて
七変化あてにされてる許容量
多面体遅日を垂らす醬油差
心音の金属音して鉄砲百合
モーターの坂を下りぬ信長忌

昼顔 井上菜摘子

約束なら昼寝のなかに置いてきし
昼顔にもらひし欠伸噛みころす
わがけものみちを曲れば合歓の風
巻尺のさささと戻り夏終る
ひぐらしの声をあつめよ死後の椅子

髪洗ふ 村田あを衣

夏安居孤影百影揺れもせず
地獄絵に余白あらざる安居寺
変身の途中揚羽とすれ違ふ
無防備な背中よ恋よ髪洗ふ
朝顔の紺は濁らず家を継ぐ





京鹿子集

鈴鹿呂仁選

京田辺 山中志津子

城陽 鷺山 珀眉

神域の靈氣いたたく夏祓

噴水の**一部始終のただならず**

流星や音なく凹むあとの闇

先づ上衣おとりあそばせ川床料理

前評判に大和撫子まぎれなし

ささゆりやけふの一会をたたみけり 京 都 片山 熙子

一握の風を自在にあめんぼう

夏蝶のもつれて雨意の遠ざかる

うきくさやそこにゐたひとゐなくなり

湖上にも起伏のありて雨つばめ

しきしまの**大和白南風丸洗ひ**

温暖化まだ間に合ふと暮鳴けり

胸中の曆どほりに姿羅開く

茶話会を囃して揚羽また揚羽

白南風や鯨供養に暮るる湾

大鎧外して緑蔭に入る

やぶ睨みして藪つ蚊の人選ひ

囀の限りとてつもなき追慕

呑み干せぬひと言四葩ぐもりかな

あくがれの夏帽を追ふ〇番線

海鳴りを海が鎮めて雁渡し
三成の陣の光陰花あふち

修羅曳きて来る初夏の波頭

天領の睡蓮なれば姫振りに

掃苔や心中とめどなき追慕

百落ちて百の開きし沙羅の花

鬼の里野くれ山くれ半夏雨

硯洗ふ心の邪鬼も流しけり

白南風や星の散らばる峡の里

立ち止まる度に青葉の影をもつ

行間を青葉のうめる新刊書

ぼくいつもその他大勢あま蛙

ひらがなの封書河鹿の沙汰を待つ

落し文晴のち雨にいそぐ恋

俳諧に卒業はなし衣更ふ

森ちゆうにムンクの叫び青嵐

朝顔に呼吸を合はせる是好日

身の内の山河は遠し夜の秋

ペディキュアを薄むらさきに夜の秋

みほとりの水の手に通く夜の秋

福 山 亀井 福恵

福 知 山 西村 白村

京 都 菊池 和子

高 槻 安田 優歌

火の糸をあえかに梳けり螢川

一邑をねむりに沈めソロの墓

風鈴をあへて鬼門に遊ばせる

文楽に涙や太夫の玉の汗

明易し噛みそこねたるホツチキス

話さねばわからぬお国夏帽子

光輪の生れし古池あめんぼう

あめんぼう時には潜り遊びたし

梅雨空や動きの鈍き薬指

白南風や時間長者のイタイイタイ病

雪溪を渡れば笑ふ膝小僧

ペーパーレス我には無縁桜桃忌

親友の微笑む写真雲の峰

水上のアルトソプラノ菖蒲苑

愛を込め無肥の新茶や御神前

和を貴ぶ独逸へ捧ぐ合歡の花

福 山 高 堀洋子

北 桑 田 小島須磨子

京 都 矢野 早苗

アリソナ 伊吹 之博

